

一番茶の安定生産が図れる樹高抑制型せん枝技術			
【要約】 一番茶後に摘採面から7cmの深さでせん枝を実施すると、樹高を一定に保ちながら、翌一番茶はせん枝をしない場合と同等の収量が得られる。一方、せん枝当年の二番茶は減収傾向になるが、せん枝のタイミングによって摘採期の調節ができる。			
農業技術振興センター・茶業指導所		【実施期間】 平成27年度～平成29年度	
【部会】 農産	【分野】 戦略的な生産振興	【予算区分】 県単	【成果分類】 指導

【背景・ねらい】

乗用型管理機導入茶園では作業高に制限があり、樹高を抑制する中切り更新（地上高40cm前後で地上部をせん除する更新法）などを定期的実施する必要があるが、中切り更新は翌一番茶の大幅な減収など生産性への影響が大きく、経営規模拡大に伴う労力的な負担からも実施が困難になっている。

そこで、毎年樹高を抑制しつつ安定生産が図れるせん枝技術を確立するために、一番茶後のせん枝（一番茶摘採面から7cmの深さ）が当年二番茶および翌年一番茶の生育に及ぼす影響について調査し、樹高抑制型せん枝技術としての有効性について検討する。

【成果の内容・特徴】

- ①一番茶後のせん枝（一番茶摘採面から7cmの深さ）によって当年二番茶の摘芽数は減少する傾向で、それに伴って摘芽重（生葉収量）も減少傾向となる（図1）。
- ②せん枝のタイミングによって二番茶摘採期は大きく変化する。一番茶摘採7日後までのせん枝では、せん枝をしない場合より二番茶摘採期が遅れることはなく、一番茶摘採当日に実施すると7日程度早まる（図1）。
- ③せん枝のタイミングが早いと二番茶芽、三番茶芽の生育が早まるため、炭そ病感染・発病のリスクが高まる（図2）。
- ④秋整枝面上の芽数は一番茶後のせん枝によって減少する（データ省略）。
- ⑤翌一番茶の摘芽数は一番茶後のせん枝によって減少せず、せん枝をしない場合と同等の摘芽重（生葉収量）が得られる。摘芽中全窒素含有量もせん枝をしない場合と同等で、品質的にも問題はない（表1）。

【成果の活用面・留意点】

- ①本技術は品種‘やぶきた’に適用でき、中切り更新による翌年一番茶の大幅な減収が回避できる。
- ②一般的に一番茶および二番茶摘採時にそれぞれ+1cm、秋整枝時に+5cm樹高が高くなるため、一番茶後に7cmの深さでせん枝を継続すれば、一定の樹高で管理することができる。
- ③一番茶後のせん枝は、連年実施しても一番茶の収量・品質への悪影響はみられない。

[具体的データ]

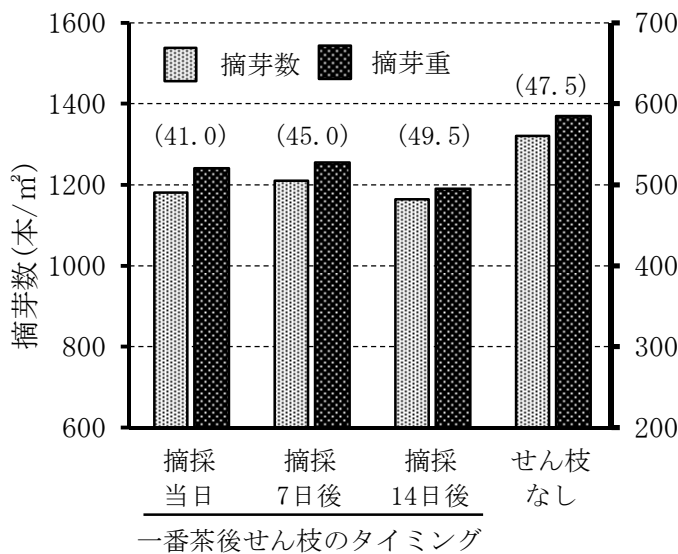


図1 一番茶後のせん枝が当年二番茶の生育に及ぼす影響 (2か年平均)

注) 一番茶摘採日: 2015年5月7日、2016年5月4日
 せん枝は一番茶摘採面から7cmの深さで実施
 ()内は一番茶から二番茶摘採までの所要日数
 枠摘み調査(20×20cm、秋整枝面から+1cm)による

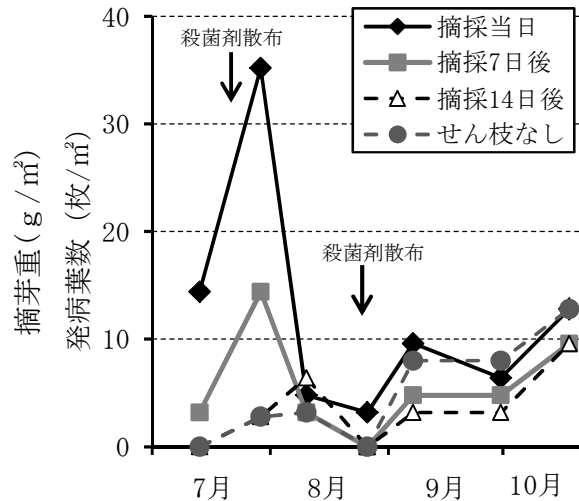


図2 一番茶後のせん枝が炭そ病の発生に及ぼす影響 (2016年)

注) 枠内(20×20cm)の発病葉数を計数

表1 一番茶後のせん枝が翌一番茶の生育と品質に及ぼす影響 (2か年平均)

一番茶後 せん枝の タイミング	出開き度 (%)	百芽重 (g)	摘芽数 (本/m ²)	摘芽重 (g/m ²)	摘芽中 全窒素 含有量 (% D.B.)
摘採当日	50.9 ^a	39.6 ^a	1394 ^a	548 ^a	5.4 ^a
摘採7日後	48.4 ^a	42.3 ^a	1372 ^a	578 ^a	5.3 ^a
摘採14日後	47.4 ^a	42.0 ^a	1450 ^a	601 ^a	5.3 ^a
せん枝なし	53.2 ^a	42.8 ^a	1392 ^a	597 ^a	5.1 ^a

注) 調査日: 2016年5月5日、2017年5月9日 調査方法: 枠摘み調査(20×20cm、秋整枝面から+1cm)
 異なる英文字間には有意差あり (Tukey HSD検定、5%)

[その他]

・研究課題名

大課題名: 戦略的な農畜水産物の生産振興に関する研究
 中課題名: 野菜等園芸作物や近江の茶の生産振興
 小課題名: 安定生産が図れる茶園の樹高管理技術の開発

・研究担当者名: 忠谷浩司・和田義彦 (H27~H29)

・その他特記事項:

平成29年11月 日本茶業学会研究発表会、平成30年2月 茶研究会で発表